

Daichikyo News

大地協ニュース

大地協ニュース復刊 第8号

発行元：NPO 法人 大阪市地域福祉施設協議会

企画委員会《広報宣伝部》

発行日：2020年9月 第8号

担当窓口：望之門保育園 佐伯 剛

TEL 6651-7741

Fax 6652-8841

大地協の最新☆情報は右記→

QRコードをご覧ください。



新型コロナウイルスなどの感染症への
予防対策、頑張りましょう！！

共生(ともに)にいきるとは

～新型コロナウイルス感染拡大のただなかで～

第25回全国地域福祉施設研修会（大阪大会）のメインテーマは、「共生(ともに)にいきるとは ～新型コロナウイルス感染拡大のただなかで～」と決定した。

2020年度は、新型コロナウイルス感染拡大に晒され、人と人のつながりが制限されている。保育園においても心配な家庭は、もはや要支援・要保護家庭に限ったことではない。その影響は、人を二極化し自分は安全な側にいると線を引きたがる心理をはたらかせ、新たな分断と差別を生んでいる。

いま、地域福祉にかかわる私たちの態度をあらためて問い直すときではないだろうか。そして、人と人が人格的なつながりにより、生きる喜びと希望を分かち合うことを通し、大地協が考える「共生」とは何かを明らかにしたい。

日本の社会は、福祉課題に対して分野別の制度を基本としてさまざまな課題の解決をめざしてきた。しかし、制度は万能ではないため、制度の狭間の問題を生み出す。

そしていま、包摂とよく言われるが、その前に分断、排除していることを問題化せず、個人の責任にして個別救済をしようとするいま、やればやるほど問題の本質が隠蔽されていくような気もしている。いま顕在化している、さまざまな福祉課題の背景にある問題の本質に私たちも当事者としてともに寄り添い、ときに杖として支え合える存在としてあり続けたい。

地域福祉は人間の尊厳と権利を守る社会的実践である。人間の弱さや脆さの視点から見れば、人権保障の制度・施策でもある。私たちは、構造的な問題から日々の暮らしの細部を見つめ、全国の友とともにまなぶ日为目标に全国研修実行委員会を立ち上げた。

そこでは、地域で起こるさまざまな現象を紹介しあい、その声なき声に耳を傾け、ともに何ができるのかを考えている。そして、ソーシャルアクション、行動を起こすことで、その動きが人の心を動かす大きな波紋になるという信念を分かち合っている。

大地協の施設は、「人のことを本気で大切にすること」が共通する特徴の一つではないだろうか。

社会福祉法人 石井記念愛染園

大国保育園 園長 西野 伸一



こんな時だからこそ、大地協に期待すること



前回の大地協ニュースの皆様の掲載記事、阿部志郎先生からのメッセージを読み、不安の中であろうとも、目の前にあるやるべきことを丁寧に一つひとつ積み上げていくということの大切さを改めて感じました。

地域福祉施設として存在するということは、誰もが安心して暮らし続けられる地域づくりを行うということでもあると思います。今、感染予防の立場に立つと、つながりを保ちにくい、集ま

ってやりとりしにくい時代になろうとしています。つながらず、集わず、やりとりをせず暮らすことを目指すのではなく、安心してつながりを持ち、不安な時には集まり、わからないときには相談できるように暮らすことを目指していきたいものです。

一つひとつの施設ができることは小さいけれども、集まることで大きくなることができると思います。その集まる舞台が大地協なのだと思います。そして、その舞台をどう形づくるのかというのは、大地協の活動を担う一人ひとりの職員とそこご家族・施設の利用者とそこご家族によって変わっていくということも言えるでしょう。

大地協は行政機関でもないですし、会員の利益だけを目指す互助組織でもありません。とても不思議な組織だと思います。この捉えようのない感じを保ちつつ、動いていくということが今の時代には合っているのではないのでしょうか。大地協にはステイではなく「どんどん動く」ということに期待をしたいと思います。

個人会員 大川明宏

「地域の可能性とわたしたちにできること」



新型コロナウイルス感染症によって、新しい生活様式を日常生活の中に取り入れるようになり、地域の人々の行動は制限され日常を奪われました。これまで「普通であったものが、普通ではなくなりつつある今」、地域で働く私たちにできることは何でしょうか。いつ終息するのかわからない、誰にもまだわからないウィルスへの怖れ。怖れは疑心と根拠のない中傷を生み、さらには差別や偏見を育み、人と人が傷つけ合って、やがて分断を起こします。もしかするとウィルスよりも怖いかもしれませんし、大切に育んできたものが一瞬で壊されてしまうのではないかと危惧しています。

今こそ大切なことを再確認する時なのではないでしょ

うか。私は「権利擁護のための地域福祉」だと考えていて、「子ども達の権利をはじめ、すべての人の人権が守られ、暮らしやすい地域社会をつくること」を目的に地道に活動しています。互いの違いを知り、理解し、分かち合えるよう「人と人をつなぐ架け橋」となってきました。「いつもそばにいて、小さなささやきを聞き逃さない」地域の声を聴ける身近な存在になりたいですし、地域に眠っている可能性を発見し、ひとつひとつ丁寧につなぎ合わせていくことで、地域課題を解決するだけでなく、人々が思う「あったらいいな」を形にしたいと考えています。

最後になりますが、歴史を振り返ってみても、感染症と人権については深く考えることができます。命を最優先にするのは当然ですが、だからといって何をしても良いわけではありません。「人権をないがしろにしていないか？」と自問自答する日々ですが、何が正解なのかはわかりません。時代とともに差別問題も変わってきていますが、人権を守る立場として、それぞれの場所で、わたしたちにできることをみなさんと一緒に考え悩んでいきたいです。

エートル社会福祉士事務所

個人会員 川崎 洋幹

「貴重なつながりの場として」

倉光会長「セツルの家と山の家のパンフレットを作ってくれへん？」

私「へ？」

8年前に、それまでほぼ面識もなかった倉光会長より突如パンフレットの作成の依頼があり、それが大地協に携わるきっかけとなり、今に至っています。それまでは自施設内での仕事が多く、あまり園外にでることのなかった私にとって大地協は面白い場所でした。

今回の原稿を書くにあたって、改めてその面白さの理由は何だろうと考えたときに、一番の理由は「それぞれの施設の肩書や職種に関係なく、気軽に真面目な話ができる雰囲気である」ということだと思います。

どうしても自施設の中だけで仕事をしていると「自施設での考え方」に染まりがちですが、大地協では、色んな職種、経験年数、役職の方がおられます。不思議と、よそのベテランの先生や、施設長の方にも気兼ねなくお話をすることがができます。そのような中での仕事の話や雑談だからこそ、私自身、新たな知識や気付きを得られることが多く、またそれが自施設での仕事にも反映することができています。福祉施設の団体は色々ありますが、このような雰囲気を持つ団体はなかなか無いのではないのでしょうか。



このつながりは職員だけではなく、9月6日～7日の中高生キャンプでも、4施設から中学生から社会人まで40名を超える人数が集まりました。今年度は土曜日授業や台風の関係で短い時間となりましたが、身近な社会問題のテーマを話し合い、一緒に遊び、一緒に食べるという時間を過ごしました。他施設のOB・OGと継続的につながることのできるこの場所も他に代わりのない貴重な場所と改めて感じました。

大地協の長い歴史の中で先輩たちが作ってこられたこの「多様なつながりの場所」こそが大地協の強みであり、施設の壁を超えた協同につながるといいますので、これからも大切にしていきたいと思っています。

やまと保育園 名城 嗣盛

大地協ニュースを楽しく読ませていただい

大地協ニュースを、ここ埼玉でも毎回楽しみに読ませていただいております。

今年は全世界が新型コロナウイルス感染拡大により、社会が大混乱に陥ってしまいました。今まで経験がなかっただけに、どこの施設でも同様だと思いますが、弊法人の保育園においても、行政からの指示を仰ぎつつ、園児の保護者と情報交換をしながら感染防止策に追われてきました。



大地協ニュースでも、各施設での新型コロナウイルス感染防止対策の様子を伝えており、日々緊張感をもって対応している私共にとって、それらの記事がたいへん参考になりました。また、励みにもなっています。

三密を避けなければならない状況ではありますが、保育園の性格上濃厚接触を避けることは困難です。緊急事態宣言発令中は、ステイホームのご協力をお願いしても、個別の事情を抱える保護者の中には、保育を希望される方も大勢いて、保育の受け入れをその都度判断しなければなりませんでした。

保育園の感染予防対策の細々した決断は、保育園に任されており、正直迷うこともしばしばあります。大地協ニュースの記事の中に「今回の件で、今後も未知のウイルスとの共存を前提として新しい生活様式の確立は避けられない…」という文言があり、目に止まりました。今回のウイルス問題を一過性のものとして捉えるのではなく、今後の保育園のあり方として、日頃から感染症対策を徹底し、安心感を持って保育園を利用していただけるよう心がけなければならないと決意を新たにしました。

安心して暮らせるまちづくり、利用者の権利擁護と自己実現などサービスの担い手として実施すべき施策を、今後もNPO法人大地協から学びたいと思っています。

ぽかぽか保育園 都築 公子

利用者に最善の利益を、Withコロナの生活の下で

短い夏休みとなった今夏、せめて楽しい思い出をと計画した学童保育高学年の1泊2日のキャンプを断腸の思いで中止、出かける予定だった8月8日にこの初稿を書いた。2日前に、愛知県で県独自の「緊急事態宣言」が発令されたための中止であった。

決行するか、中止とするか、指導員で話し合い、子どもの意見も聞いて決めた。当然のように、決行するという意見でまとまるかと思いきや、意に反して慎重な声が大半を占め、中止することになった。子どもたちは、本当は行きたいだろうと思うのだが、慎重論も出るあたりにコロナが子どもの心にも大きな影を落としていることが窺える。

一方、8月1日の土曜日は、1,2年生を対象に日帰りの川遊びを実施した。観光バスを借り上げ、社会館から1時間もかからない距離の鈴鹿山系の朝明溪谷というところで存分に川遊びを満喫した。多くの保護者が、「子どもがとても楽しかったと言っている。連れて行って欲しくてうれしかった。」と話してくれた。この時は、まだ一日の感染者数が割合に少なかったのも、周りから批判的な目が注がれるということではなかった。それが、今日からのキャンプを決行するとしたら、何事もなくとも、それを知った地域住民らから何を言われるかという不安が、中止という思いに傾かせたようである。

社会館内部においても、事業推進、運営に関わる様々なところで、ゴーか否かで意見が分かれる。どちらが正しいとか簡単には決められないため、自分の思いを胸にしまい込むしかないことが続いている。

高齢者デイサービス事業所では、3月に隣接する緑区の福祉施設から陽性判定者が出てクラスター化、自治体より 緑区と隣接の社会館本館がある南区の高齢者デイサービス事業所等に対して休業の要請が出された。社会館のデイサービスは、職員ですぐに話し合い、「デイサービスを閉じたら、即 生活に困る方がおら

れる。その方向けには開業するしかない。」との結論に至り、感染予防策を徹底して、受け入れるべき方に限って利用を継続した。マスコミが何度も取材に来てニュースで取り上げられた。その同じクラスターから、社会館の障がい者グループホームの利用者の一人が陽性診断となり、20日間ほど隔離入院生活を余儀なくされた。行政や保健所、利用者家族等々からひっきりなしの電話が入り、一時はパニック状態を呈したが、幸いにして他への拡がりはなく済んだ。その後は、社会館全事業所で濃厚接触者と判定される人は出るものの、職員、利用者、家族からPCR検査陽性判定となる人はなく、今に至っている。

私たちが日ごろ関わらせて頂いている人々の最善の利益を、With コロナという生活のなかでどう保障するのか!? 大いに悩むところである。3月から6月にかけての3か月、学童保育は、狭いクラブ室で朝早くから夕方7時までを過ごした。体温測定等の健康管理、消毒・換気の徹底はできても、密を避ける、フィジカル・ディスタンスをとるということには限界がある。そんな環境での生活より、せめて一定時間、学校で過ごす方がより良い環境だろうにとか、学校の先生は何をやっているんだという思いが胸の底に溜まってくる。一方で、学童保育に通ってきている子どもは、家庭でじっとした生活を強いられている子どもたちに比べ、友だちと過ごすことができる、テーマパークで廃棄するより有効活用してもらおうと配布されるお土産用のお菓子などをふんだんに食べられたりして、余程良い生活を送れているなど思ったりもした。名古屋ではいよいよ8月17日から学校が再開された。今年はプールに入る授業もないし、どうやら普通の学校生活とは違うようだし、多勢が集まるような行事もないと聞く。

With コロナ下、私たち福祉に携わる者には、意見の違いを受け止める寛容さとともに、最善の利益保障のための、一層の創意工夫が求められている。



名古屋キリスト教社会館

谷川 修